

縄文時代中期における翡翠以外の 石材を素材とする垂飾の存在

小林 清 隆

はじめに

縄文時代中期を代表する石製品といえば、真っ先に翡翠製大珠を思い浮かべるであろう。翡翠製¹⁾の大珠は、主に新潟県西部から富山県東部にかけての通称「ヒスイ海岸」に面する遺跡や、翡翠を産する姫川下流域の遺跡で主に生産され、東日本を中心に、千葉県のような遠隔地に所在する遺跡からも出土する。しかし、1遺跡から出土する翡翠製大珠は、茨城県坪井上遺跡の8点²⁾というような稀な例を除けば、複数の点数に遭遇する機会は減多にない。自身がこれまでにかかわった遺跡では、君津市三直貝塚で複数の大珠と多くの翡翠製品を発掘し(吉野2006)、東金市・大網白里市の両市にまたがる養安寺遺跡においては2点の大珠を報告した(小林ほか2017)。また、柏市小山台遺跡B区からは7点が出土し、しかも5点が翡翠製であった(西川ほか2019)。そのような遺跡に携われたことは、単に幸運にすぎなかったのかもしれない。大珠が希少という傾向は、現在でも変わりのないことである。

これまでに千葉県内における大珠の在り方については数回述べており、集成と資料の追加を行ってきた(小林2010・2012・2016・2020)。集成を行うと必然的に大珠以外の石製垂飾にも目が留まった。そして大珠が希少であるように、翡翠以外の石材を用いた垂飾も希少であることがわかった。そこで今回は、大珠の影に隠れがちであった、翡翠以外の石材で作られた垂飾を概観し、存在の再確認を行いたい。

1 翡翠製大珠を多出した遺跡での垂飾

大珠の調査を進めていく中で注目したのは、複数個の大珠が出土している遺跡で出土している垂飾の存在である。石材や大きさが明らかに異なる2種の石製品が出土するというこの意味とは何か。まず、発掘により複数の大珠が出土した3遺跡を取り上げてみたい。その3遺跡は、ほぼ同時期に環状集落が形成された、千葉県柏市に所在する小山台遺跡、東京都町田市の忠生遺跡(川口ほか2006・2007・2011)、長野県茅野市の長峯遺跡(柳澤ほか2005)である。位置的には、大珠の

生産遺跡が多く分布する糸魚川市周辺と忠生遺跡の間に長峯遺跡が所在し、忠生遺跡からさらに北東側に小山台遺跡が位置する。なお、以下にふれる遺構等の時期については、基本的に報告書の記載にしたがうことにする³⁾。

柏市小山台遺跡B区

遺跡は下総台地の北西端部に位置する。遺跡の北側は古鬼怒湾に面する。一部未調査部分を残しているが、ほぼ全域を調査している。調査では中期に帰属する302軒を上回る竪穴住居や、貯蔵穴と考えられる土坑が多数発見された。集落は広場を囲む土坑と、その外縁に構築した竪穴住居という、典型的な環状集落の在り方を呈し、それが台地上の2か所に展開している。



1：小山台遺跡 2：忠生遺跡 3：長峯遺跡

第1図 遺跡の位置

北側の集落を環状集落Ⅱ、南側を環状集落Ⅰと呼んでいる。ここから3点の垂飾が出土している。

第2図1は、堅穴住居帯からやや離れた位置に、数基からなる土坑群が存在し、その1基から検出されたものである。土坑の規模は、長径169cm、短径150cm、深さ96cmで、深さから考えて貯蔵穴であったと推測される。その土坑の覆土中から出土しており、報告書では帰属時期を加曾利E3(新)式期に比定している。2は破損しているが、本来は扁平で長楕円形に整形された垂飾であったと推測され、その後欠損し、当初の穿孔位置の上側に穿孔を行い、さらに破断面に研磨を施し、再生して使用していたとみられる。石材はやや透明感がある濃緑色の滑石である。加曾利E3(新)式期に比定されている堅穴住居から出土した。もう1点は3で、これは四角柱状に四面が研磨されている。垂飾の破損品とみられる。環状集落Ⅱの(54)SI004から出土している。時期は阿玉台Ⅳ式期に比定され、覆土中から出土したと推測される。このほかに磨製石斧の基部付近に穿孔を開始し、その初期段階で止めている有孔石斧の未成品が1点出土している。

冒頭に述べたように、この遺跡からは翡翠製5点と翡翠以外の石材で作られた2点の、合計7点の大珠が出土している。大珠の出土状況は、堅穴住居内から2点、土坑から1点、遺構外が4点である。遺構の時期は、堅穴住居の1軒が阿玉台Ⅳ式期、土坑が加曾利E1式期で、ほかは時期の推定が困難な状況である。

町田市忠生遺跡

東京都町田市に所在し、境川の河岸段丘上に展開する遺跡群である。そのA1地区から堅穴住居145軒、掘立柱建物8棟、土坑313基、ピット4200か所等が検出されている(川口ほか2006)。堅穴住居の分布は広場を囲んで環状に存在したと推定される。調査前に集落の約2分の1が失われていたので、全体ではかなりの遺構が構築されていたと考えられる。集落の形成期間は、勝坂式期～加曾利E式期にわたっている。勝坂式期の堅穴住居の構築が広場を広くとった位置で開始され、加曾利E3式期には狭まった広場を囲んで住居帯が形成される。

この集落から出土した垂飾は8点で、すべてが堅穴住居内から出土し、その帰属時期は加曾利E3式期に比定されている。垂飾の出土時の状態は、完形品と欠損品が半々である。石材は報告書によれば、滑石3点、軟質細粒凝灰岩、弱固結シルト岩、アルビタイト、緑閃石、粘板岩が各1点ずつになる。形態は様々で、い

わゆる鯉節形に近い形態、長楕円形、半月形などがみられるが、上述したように半数が完形を保っていないため、全体の形態は推定復元によるものである。

遺跡からは大珠が計6点出土し、4点が遺構内から出土している。3点が堅穴住居内、1点が土坑である。出土遺構の時期の内訳では勝坂2式期2点、勝坂3式期1点、加曾利E3式期1点と、時期については開きがある。加曾利E3式期に比定されている112号住居跡では、大珠1点が出土しているが、これは穿孔初期段階で未貫通となっており未成品と考えられている。

茅野市長峯遺跡

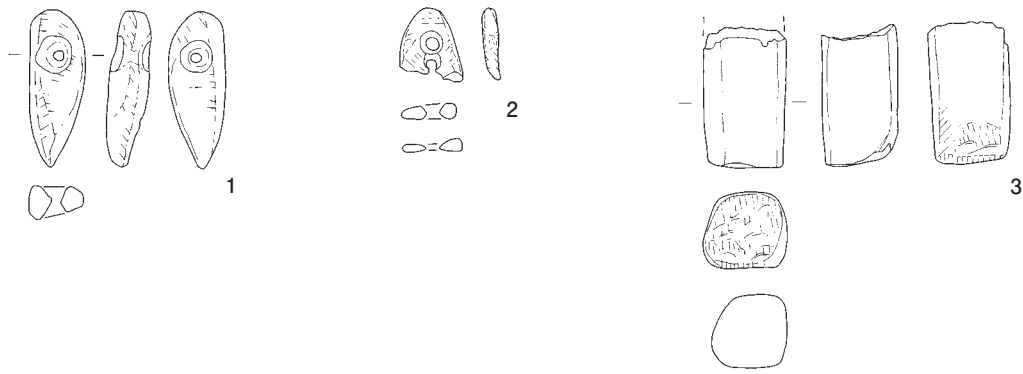
長野県茅野市に所在する。東西に長い細尾根状の台地上とその南側の沢に面する斜面に立地する。遺跡の西には聖山遺跡が展開する。長峯遺跡で発掘した中期の堅穴住居は228軒、土坑は3436基を数えている。中期中葉5期とされる勝坂Ⅴ式期から環状集落が形成され、曾利Ⅰ・Ⅱ式期にかけて集落規模を拡大していく。発掘によって5点の垂飾が出土している。垂飾の出土状況は、堅穴住居1点、土坑出土3点、出土地点不明が1点である。堅穴住居出土のものはピット内で、土坑出土の3点はいずれも底面からではない。遺構の時期は、堅穴住居については勝坂Ⅲ式期、土坑はいずれも中期に比定されているが、それぞれ時期については幅がある。垂飾の形態は様々で、石材は滑石3点、透閃石岩1点、曹長石1点と鑑定されている。滑石が多いものの、形態は一つ一つ異なり、その点についての特徴は見いだせない。ただ、大型のものが多いようにみえる。

大珠は7点出土している。その中でも3点の翡翠製大珠が、近接する隅丸長方形の土坑から各1点ずつ出土するという興味深い例が報告されている。

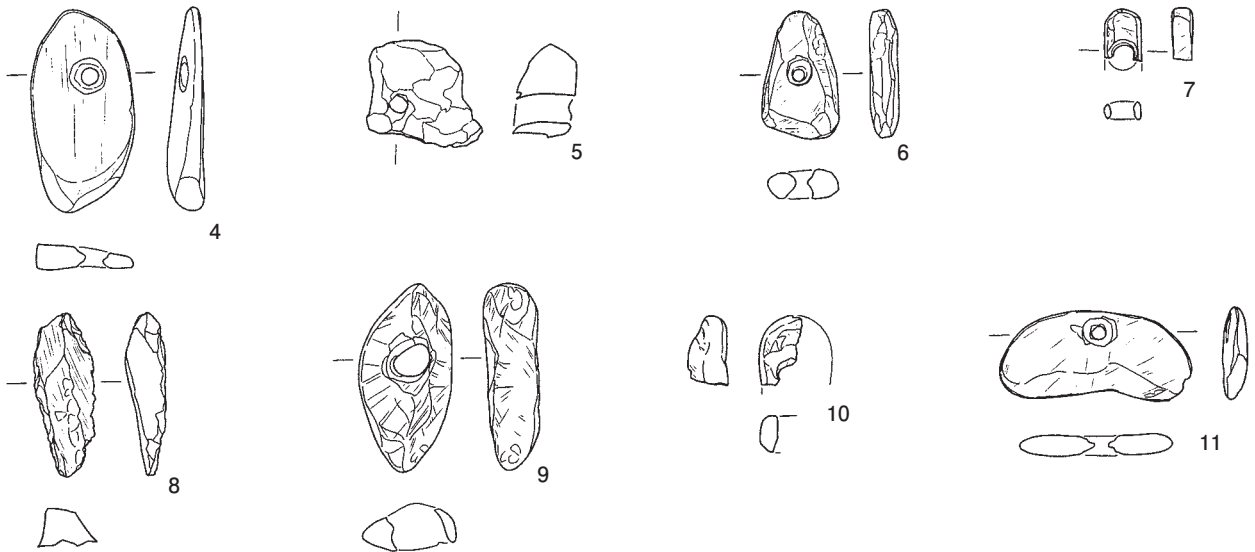
3遺跡での傾向

以上、大規模な環状集落が検出された3遺跡から出土した、垂飾並びに大珠について確認した。垂飾の出土については第1表に示したようになる。さらに、この3遺跡から出土している垂飾と大珠の在り方を検討するため、第2表～第4表を提示する。

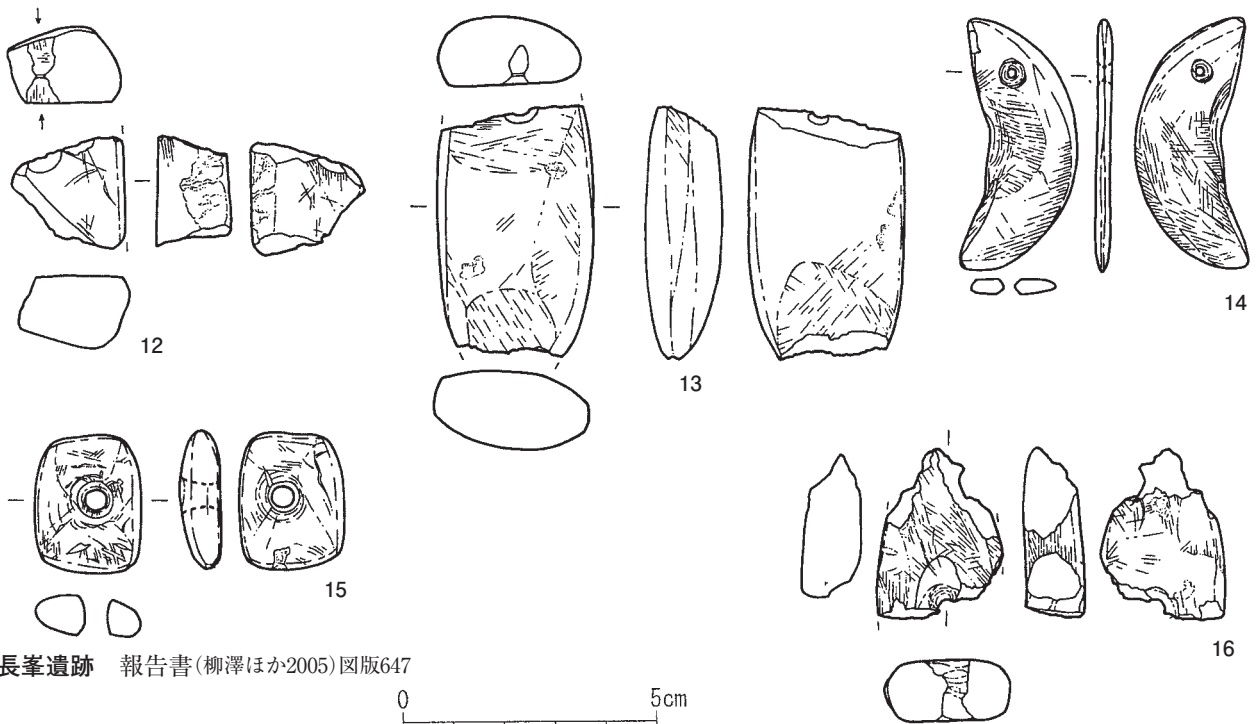
3遺跡における垂飾の点数は、小山台遺跡B区3点、忠生遺跡A地区8点、長峯遺跡5点である。これらがどの位置から出土したか確認すると、小山台遺跡B区では堅穴住居2点、土坑1点、忠生遺跡A地区は8点すべて堅穴住居からの出土で、長峯遺跡では堅穴住居1点、土坑3点、不明1点となる。垂飾の帰属時期を比定するには、後述するとおりの困難さが伴うので、



小山台遺跡 報告書(西川ほか2019)第605図を再トレース



忠生遺跡 報告書(川口ほか2011) 4 : 第24図、 5 : 第35図、 6 : 第59図、 7~9 : 第67図、 10 : 第74図、 11 : 第76図



長峯遺跡 報告書(柳澤ほか2005)図版647



第2図 大珠を多出した3遺跡の垂飾

第1表 大珠を多出した3遺跡の垂飾一覧

遺跡名	図No.	遺構名	種別	出土状況	共伴遺物	垂飾の特徴	石材	時期
小山台遺跡B区	1	(9)SK006	住居	覆土	土器	逆涙形 完形	滑石	加曽利E3(新)
	2	(68)SI009	土坑	床面からやや上	土器・石鏃	長楕円形 欠損	滑石	加曽利E3(新)
	3	(54)SI004	住居	覆土下層	土器・土錘・石鏃	四角柱形 欠損	透閃石岩	阿玉台Ⅳ
忠生遺跡A地区	4	15号住居址	住居	覆土	土器・石斧・石鏃	鯉節型 完形	軟質細粒凝灰岩	加曽利E3
	5	32号住居址	住居	覆土	土器・敲石・石皿	不定形 欠損	弱固結シルト岩	加曽利E3
	6	87号住居址	住居	床上	土器・石斧・石鏃	完形	滑石	加曽利E3
	7	102号住居址	住居	覆土上	土器・石斧・石鏃	長楕円形 欠損	滑石	加曽利E3
	8			覆土		一部	アルビタイト?	
	9			覆土		完形	滑石	
	10	112号住居址	住居	覆土	土器・大珠・石斧・石皿	長楕円形? 欠損	緑閃石?	加曽利E3
	11	116号住居址	住居	覆土上	土器・石斧・敲石・石皿	半月型? 完形	粘板岩	加曽利E3
長峯遺跡	12	地点不明				上部に孔 欠損	曹長岩	
	13	SB185	住居	ピット内	土器・石器	靴籠形	滑石	勝坂Ⅲ
	14	SK2597	土坑	底面からやや上		の字状石製品の転用	透閃石岩	中期後葉
	15	SK0174	土坑	覆土上層	土器	平面形態隅丸長方形	滑石	五領ヶ台Ⅱ
	16	SK0583	土坑	中層		欠損 一部のみ	滑石	曾利

一旦、時期を度外視して3遺跡の遺構別出土点数を集計しておく、堅穴住居11点で、土坑4点、不明が1点という結果になり、堅穴住居の出土が断然多いといえよう。

個々の垂飾の時期を比定するには、出土した遺構に伴う土器の情報に依拠することになるが、大規模な環状集落では、同一場所での反復利用が行われ、数回にわたり掘り返され、埋め戻される。したがって、堅穴住居や土坑の床面や底面に密着する状態で出土した場合を除けば、遺物の帰属とその時期の扱いは慎重にならざるをえない。ましてや小型の垂飾のような遺物については、土器や大型石器などと比べると、様々な要因で覆土に混入する可能性が高いと考えられる。そのような前提条件付きで、比定された遺構の時期イコール垂飾の時期とすれば、中期前葉1点、勝坂・阿玉台式期2点、加曽利E式期前半2点、加曽利E式期後半10点、不明1点である。その結果をみるかぎり、加曽利E式期後半に集中する。特に、関東地方に所在する小山台遺跡B区と忠生遺跡A地区では、11点中10点が加曽利E3式期である。それらと対照的に、長峯遺跡では加曽利E式期後半に並行する時期には1点も出土しておらず、それより前の時期に限定される。

次に使用している石材をまとめると、滑石が8点と半数を占め、透閃石岩2点、軟質細粒凝灰岩、弱固結シルト岩、アルビタイト、閃緑岩、曹長岩が各1点で、滑石と透閃石岩以外の石材は加曽利E式期後半に使用されている。主に緑色系の石材が選択されるが、翡翠と比較すると、かなり軟質である滑石を素材にするものが多い。

大珠との比較

3遺跡の合計で16点の垂飾が出土している。この点数は大珠の19点を下回る点数である。といっても、3遺跡の大珠の出土点数が突出しているのも、垂飾も同程度の点数が出土しているとみて差し支えないであろう。出土状況では堅穴住居5点、土坑7点、遺構外7点の内訳になる。遺構外7点の内5点が小山台遺跡B区である。また、土坑から出土した大珠が7点存在するが、半分以上の5点が長峯遺跡から出土している。また、傾向として堅穴住居出土の割合が少ない。関東地方の2遺跡は、垂飾の出土状況が大珠のそれに似ており、特別な意味を持つような場所での出土ではないと考えられる。

大珠の帰属時期決定には困難が伴う。示された時期にしたがうと、勝坂・阿玉台式期(及び並行期)4点、加曽利E式期前半2点、加曽利E式期後半1点、時期不明12点である。勝坂・阿玉台式期に比定された大珠が多く、時期が新しくなるにしたがい点数を減じていく。ただ、加曽利E3式期とされている忠生遺跡A地区で検出された112号住居址から出土している大珠は、アルビタイト製とされる未成品で、同堅穴住居からは垂飾も出土している。したがって、時期比定された翡翠製大珠は、勝坂・阿玉台式期から加曽利E式期前半のものが占めていることになる。3遺跡の結果からは大珠が先行し、垂飾がその後に出現してくる状況が肯定されるかもしれない。果たしてそうなのか。この点は後で検証することにした。

垂飾の形態については多様であり、翡翠製大珠のような形態分類は進展していない。色調に関しては、緑

第2表 3遺跡における時期別垂飾出土状況

遺跡名	時期 出土場所	中期前葉	勝坂 阿玉台式期	加曾利E 式期前半	加曾利E 式期後半	中期 (不明)	小計
小山台遺跡 B区	竪穴住居		1		1		2
	土坑				1		1
	遺構外						0
忠生遺跡 A地区	竪穴住居				8		8
	土坑						0
	遺構外						0
長峯遺跡	竪穴住居		1				1
	土坑	1		2			3
	遺構外					1	1
計		1	2	2	10	1	16
竪穴住居		0	2	0	9	0	11
土坑		1	0	2	1	0	4
遺構外		0	0	0	0	1	1
計		1	2	2	10	1	16

第3表 3遺跡における時期別垂飾石材

遺跡名	中期前葉	勝坂 阿玉台式期	加曾利E 式期前半	加曾利E 式期後半	中期 (不明)	小計
滑石	1	1	1	5		8
透閃石岩		1	1			2
軟質細粒凝灰岩				1		1
弱固結シルト岩				1		1
アルピタイト?				1		1
緑閃石?				1		1
粘板岩				1		1
曹長岩					1	1
計	1	2	2	10	1	16

第4表 3遺跡における時期別大珠出土状況

遺跡名	時期 出土場所	中期前葉	勝坂 阿玉台式期	加曾利E 式期前半	加曾利E 式期後半	中期 (不明)	小計
小山台遺跡 B区	竪穴住居		1			1	2
	土坑			1			1
	遺構外					4	4
忠生遺跡 A地区	竪穴住居		2		1		3
	土坑		1				1
	遺構外					2	2
長峯遺跡	竪穴住居						0
	土坑			1		4	5
	遺構外					1	1
計		0	4	2	1	12	19
竪穴住居		0	3	0	1	1	5
土坑		0	1	2	0	4	7
遺構外		0	0	0	0	7	7
計		0	4	2	1	12	19

色系統の発色石材が多く選択され、大珠との共通性を認めることができる。

被熱については、小山台遺跡B区から出土した3点を観察した限りでは、顕著な痕跡は認められない。ほかの遺跡についても特に被熱はふれられていない。

以上、地域が異なる環状集落の垂飾の在り方を確認してきた。次に県内の遺跡から出土している垂飾について幾つか取り上げておこう。

2 千葉県内の類例

流山市中野久木谷頭遺跡C地点

遺跡は標高17m～20mの舌状台地に立地し、環状集落のほぼ全容が把握されている(川根ほか1997)。C地点では竪穴住居153軒、土坑989基、53か所の地点貝層などが検出されている。大珠2点のほかに翡翠製の垂飾1点と垂飾2点が出土している。第3図1は竪穴住居SI108から出土した玉である。欠損状態で全体の形状は不明で、石材は蛇紋岩と鑑定されている。2は竪穴住居SI57から出土した垂飾未成品である。細身の石斧状に対して穿孔を開始している。石材は蛇紋岩である。この2点の帰属時期は明らかになっていないが、加曽利E式期前半である可能性が高い。

船橋市高根木戸遺跡

遺跡は標高27m前後の舌状台地に立地する。環状集落の全容が捉えられた遺跡として古くから知られ、竪穴住居75軒、土坑129基などが検出されている(西野ほか1971)。第3図3の垂飾は、広場の北側に分布する土坑帯の1基であるS031から出土している。出土層位などの具体的な状況は不明である。遺跡からは、翡翠製大珠1点と垂飾の破片1点が出土している。

千葉市有吉北貝塚

遺跡は標高35m前後の舌状台地上に立地し、竪穴住居134軒、土坑780基などが検出された環状集落として有名である(小笠原ほか1998)。ここでは大珠2点のほか、石製品が出土しており、これについては、後述する草刈遺跡B区とともに、すでに紹介したことがある(小林2008)。第3図4は貝層から出土した薄く細長いヘラ状の形態を呈する垂飾で、穿孔は2か所に行われている。5・6は管玉状で、側面にも孔が穿たれたものである。7は加曽利E I式期の竪穴住居から出土した弓形の垂飾で、中央部に孔が穿たれている。8は北斜面部から出土した。扁平な楕円形の形状が推定されるが、孔の位置で欠損している。9・10は土坑から出土している。孔は遺存していないが、垂飾の一部と考

えられる。11は遺構外出土で、同じく垂飾の一部と考えられる。

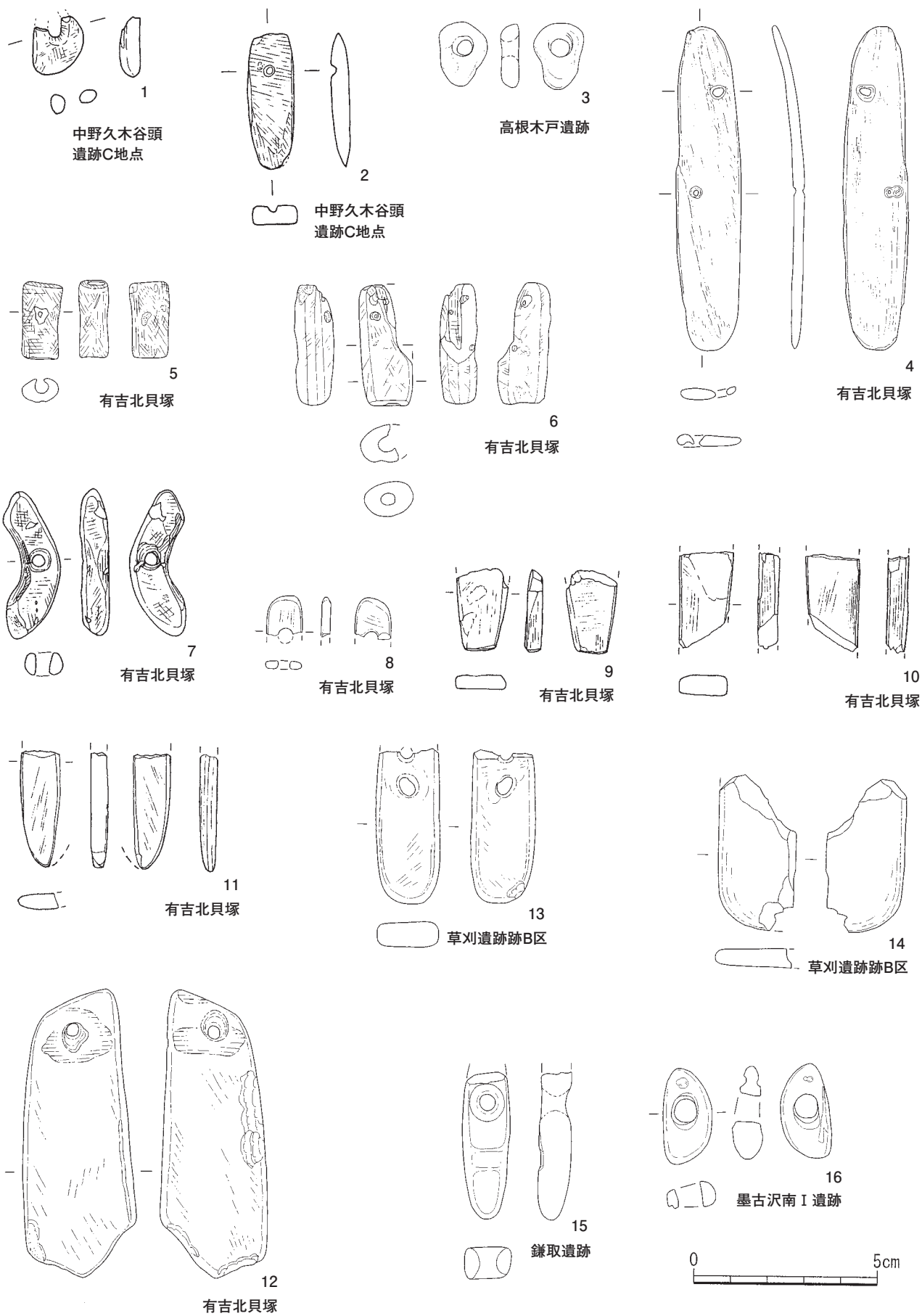
市原市草刈遺跡B区

典型的な下総タイプの環状集落を、ほぼ全掘した遺跡として知られている(高田ほか1986)。ここからは穿孔を有する石製品が3点出土している。第3図12は竪穴住居の床面から出土した。石材は全体に黒っぽい蛇紋岩で、右側に擦切痕がわずかに認められ、全体は扁平に調整されて、上部に両側から穿孔を行っている。長さ8cm弱で、大きさからいえば大珠になるが、非翡翠系石材の垂飾として挙げることにしたい。13は表採扱いとしており、石材は滑石で上部が欠損する。欠損部は当初の孔が穿たれた位置で、その下位にも孔が存在する。下の孔は欠損後に再度穿たれたと考えられる。14は穿孔部位が残存していない。石材は凝灰岩で、色調は乳白色である。ほかに遺構外から完形の翡翠製大珠2点が出土している。

3 垂飾の盛行時期

県内の類例を数例抽出してみたが、まず環状集落からの出土に目が留まることとなった。環状集落の形成は、阿玉台式期後半から開始され、加曽利E式期前半に盛行期となり、そして加曽利E式期後半に入ったところに終焉をむかえる。そのような経過をたどるのが一般的である。長期間にわたって集落が営まれ、出土遺物が多種・多様でかつ多量になりその結果として、単に遺跡に持ち込また垂飾の発見機会が多いということになったのであろうか。しかし、長期間に形成された遺跡である小山台遺跡B区で出土した垂飾3点のうち2点が、忠生遺跡A地区8点全部が、環状集落の終焉期の加曽利E3(新)式期、あるいは加曽利E3式期の時期に比定された遺構から出土している。そこからは、先述したように、垂飾が加曽利E式後半期に至り出現する石製品と見做すこともできよう。そして、それが実態を示すかは検証が必要であろう。

実際に加曽利E式期後半の遺跡から出土している垂飾が存在する。千葉市緑区おゆみ野の鎌取遺跡では(三浦ほか1993)、中期に営まれた竪穴住居13軒、土坑3基などが検出され、その中の1軒から垂飾が出土している。第3図15は竪穴住居007号跡から出土したものである。石材は蛇紋岩で、長楕円形に成形し、片面に1か所の浅い窪みを作出する。穿孔は中心からやや上部で、両側からである。出土した位置は、竪穴住居の南側の壁際で床面からやや浮いた場所である。この遺



第3図 千葉県から出土した主な垂飾

構の時期は加曾利EⅢ式期である。鎌取遺跡から出土した垂飾はこの1点のみである。この遺跡と谷を挟んだ南側の台地には、有吉北貝塚、さらに有吉南貝塚が立地している。

また、印旛沼水系である鹿島川に流入する高崎川左岸の、標高35mの台地上に立地する酒々井町墨古沢南Ⅰ遺跡(横山ほか2005)では、竪穴住居58軒、土坑278基などが検出されている。集落は加曾利EⅢ式期から称名寺式期に営まれ、中心となる時期は、加曾利EⅢ式期から加曾利EⅣ式期になると考えられる。この調査でも1点の垂飾が出土している。第3図16は522号土坑から出土、平面形状は半月形を呈し、中央に両側穿孔による孔が存在する。この孔の上部両側に小さな窪みが認められ、これは当初予定していた孔の位置だと推測される。石材は滑石で、薄緑色の色を放っている。出土した土坑は単独で検出され、径116cm、深さ39cmである。垂飾は一括取り上げの遺物の中に含まれており、出土レベルは不明である。土坑の時期は、「加曾利EⅢ式期の可能性がある」としている。遺跡の周辺には中期の集落が多く存在し、北東に向かうと、翡翠製大珠2点が出土した環状集落である飯積原山遺跡(西川ほか2015)が所在する。

このような事例から、加曾利E式期後半に存在することは否定できない。

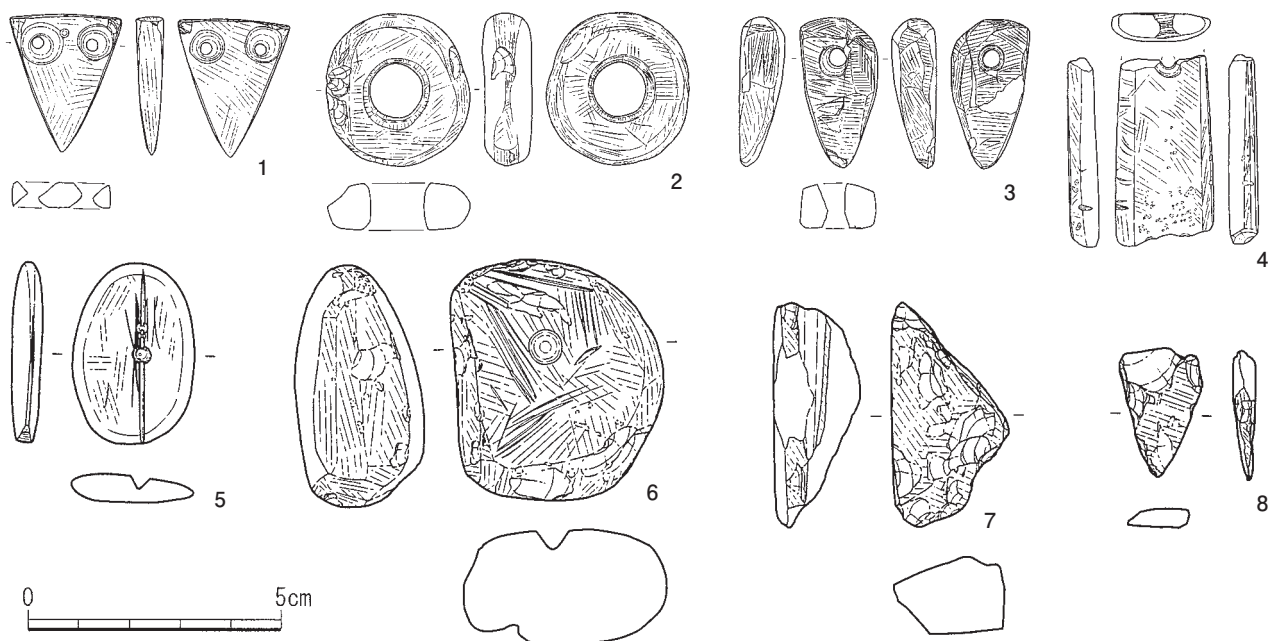
次に、阿玉台式期から開始された環状集落が衰退した後に形成が始まった、加曾利E式期後半の集落での垂飾の出土状況を確認しておく必要がある。数遺跡を

抽出して検討しておこう。

柏市の林台遺跡(井上1989、加納1995)では、70軒以上の竪穴住居が検出されている。ここでは大珠は無論のこと、垂飾は1点も出土していない。成田市雉子ヶ原遺跡(喜多1989)では、竪穴住居55軒、土坑321基などが発見されたが、垂飾の出土は皆無である。香取市(旧佐原市)の多田遺跡では(上守ほか1992)、竪穴住居42軒、埋甕2基、土坑268基などを検出しているが垂飾は存在しない。小規模な集落が形成された芝山町古宿・上谷遺跡(岡田ほか1998、加納2020)、千葉市中野僧御堂遺跡(斎木ほか1976)、市原市中潤ヶ広遺跡(大内ほか2006)の調査においても垂飾は報告されていない。

一見、環状集落の終焉期から出現したような観がある、翡翠以外の石材で作られた垂飾は、林台遺跡、雉子ヶ原遺跡、多田遺跡のような遺跡でさえ出土例を見つけないことができる。このような状況から、出現・盛行時期について、加曾利E式期後半とすることに躊躇せざるをえない。

このことは、翡翠成品や垂飾の生産を行っていたと考えられる遺跡の資料によっても補強される。第4図に示した石製品と未成品は、新潟県糸魚川市に所在する六反田南遺跡から出土した資料である(高橋ほか2018)。遺跡は糸魚川市中心地からみて東側で、現海岸線から200m入った標高3m～5mの低地から自然堤防上に立地する。集落は縄文中期前葉～中葉(下層)と中期中葉(中層)に形成され、それぞれの時期に廃棄



第4図 糸魚川市六反田南遺跡から出土した石製品

域が検出されている。第4図は下層の廃棄域から検出した遺物である。1は二等辺三角形の底辺近くに2孔を穿った垂飾で、サメの歯を模した鮫歯玉と考えられるものである。石材は透明感のある透閃石岩を用いている。2は環状を呈する玉である。穿孔は両側から行われている。石材は透閃石岩である。千葉県内では有吉城跡から類似の石製品が単独で出土している⁴⁾。3は下端をにぶく尖らせて上部は一端が尖り気味でもう一端は角を取っている。4は上下が欠損し全体の形状が不明になっているが、上部に孔が存在することから玉にしている。形態は、長峯遺跡出土の垂飾(第2図13)や草刈遺跡B区の垂飾(第3図12)に共通点が見いだせる。5～8は未成品で、いずれも研磨痕が認められ、石材は透閃石岩である。ここでは翡翠製大珠の成品は発見されていないが、翡翠の原石や剥片が多数出土しているので、大珠の生産が行われていた可能性もある。時期的には天神山式期の期間と考えられる。また、木島勉氏は、姫川下流域に立地する遺跡は「中期前葉末から中葉になると集落規模を大きくし、中・後葉を盛期とする集落跡が海岸部に出現」し、「ヒスイやネフライト製大珠、滑石などの垂玉製作資料も出土している」と紹介している(木島2019)。このような生産遺跡における検出例から推測しても、中期末に近い時期に翡翠以外の石材を素材とする垂飾生産が盛んになったという確証は得られない。

まとめ

中期の石製品を特徴づける翡翠製大珠は、大きく、宝石石材で、希少さ故に存在感を放ち、注目される機会が多く、研究蓄積も進んでいる。土肥孝氏は、中期の装身具を解説する中で、「中期の装身具は前代の(青・緑・白といった)色調へのこだわりから、大きさへのこだわりへの変換をうかがわせる」と述べている(土肥1997)。一方で、翡翠以外の石材を素材にした中期の垂飾は、これまで検討の外に置かれてきた印象が強い。山本直人氏は、「翡翠大珠の製作に特化されていたためか、他のビーズの出土例はほとんどみられない」と、中期の装身具を総括している(山本2020)。

今回は、非翡翠系石材の垂飾の存在を再確認することを目的とし、その大略をつかむことに主眼をおいた。

はじめに地域を異にする3か所の環状集落に注目した。いずれも翡翠製大珠が複数個出土し、垂飾も検出されている遺跡である。垂飾が出土した遺構は、堅穴住居内からが最も多く、その時期は加曽利E式期後半

に並行する時期とみられる。石材では滑石が多くを占めている。以上のような状況であった。特に出土状況からは、翡翠製大珠と同様に、堀越正行氏がいうような「送り」の行為に伴う結果であったと理解すれば(堀越2019)、個々の出土状況に深く意味づけする必要性は弱いと思われる。

千葉県内の垂飾を幾つか抽出して、埋葬人骨に伴う出土例は皆無であることがわかった。この状況も大珠での在り方と同様で、死後にまで装着されてはいなかった。また、佩用に性差があったのか、状態はどうであったのか、今のところ、その検証は容易ではない。

帰属時期については、一見加曽利E式期後半に伴うとの状況がみられる。しかし、環状集落からの出土が多いといえても、それが加曽利E式期後半に出現して盛行するという様相はみえない。

当初の契機となった、大珠を多く出土する環状集落からは、翡翠以外の素材による垂飾が出土している、という傾向は勿論のこと、大珠が出土した遺跡で垂飾が発見される機会が多い。したがって、大珠の盛行期に垂飾も生産され流通する、という見通しを持った。大珠と比較し攻玉が容易なので、数多く生産されてもよさそうと考えられるが、大量生産された痕跡はどこにもなく、あたかも大珠と対を成して流通していたかのようなようである。

以前、県内の後晩期の玉類を概観した折に、翡翠は「中期の大珠盛行期に主要石材としての存在感を発揮」し、後期から晩期をとおして玉類の素材となることを確認した(小林2017)。そして、後期以降の玉類は翡翠素材の玉に対して、翡翠以外の石材による同形態の玉が作られていることも示した。逆の視点に立てば、後期からは翡翠以外の石材を素材とする玉類は、翡翠でも生産されていたということになる。しかし、ネフライト製、滑石製や石英製大珠は生産されるが、環状や柱状の形態に仕上げられた垂飾に対応する翡翠製垂飾は生産されていない。

以上のように、中期の遺跡から出土する垂飾は、出土状況や欠損品が多い遺存状態などで大珠と共通した在り方を示す。一方で、大きさや形態など異なる点があり、その実相となると未だ不明な部分が多い。垂飾が大珠と同じ意味合いを持っていたのか、それとも両者がそれぞれ異質な象徴であったのだろうか。他にも追究すべき課題はある。今は、大珠と同時期に、必要とされる集団のために流通した、大珠と近似した機能(小林2010)を有していた石製品と考えておきたい。

注

- 1) 一般社団法人日本鉱物科学会が2016年9月に選定した「国石に「ひすい」が選ばれた。そこでは、中国由来の「翡翠」と日本での「翡翠」の意味合い等を区別するために、「ひすい」と平仮名表記を用いるとしている(土山明編2019)。小論での「翡翠」は国石「ひすい」と同じ「主としてひすい輝石という鉱物からなる石」をいっている。
- 2) 常陸大宮市坪井上遺跡からは、発掘で3点の翡翠製大珠が出土(千種ほか1999)、採集されたもの5点、計8点の大珠の存在が知られている。さらに出所について検証できないが、もう1点坪井上遺跡出土大珠と伝わるものが存在するという(村串2020)。
- 3) 加曾利E式土器については、長年にわたる研究の蓄積があり、研究が深化する一方で、見解の一致がみられない状況が続いている。個々の編年について自身の理解不足があり、報告書の記述にしたがうことにした。筆者は明瞭な口縁部文様帯を持ち、胴部に磨消懸垂文が伴う時期を加曾利EⅡ式とし、その時期までを加曾利E式前半とした。
- 4) 千葉市有吉城跡の発掘で、類似の環状(浮輪形)の玉が出土している(加藤ほか2002)。かつてこの玉を取り上げた際に、周辺から出土している土器が条痕文系土器であったということから、早期の可能性を考えた(小林2008)。六反田南遺跡の環状を呈する玉と石材は異なるが、形態が大変類似しており、有吉城跡出土品の時期的な位置づけについては再考の必要があろう。

引用・参考文献

- 井上文男 1989『柏市埋蔵文化財調査報告書14-林台遺跡-』柏市教育委員会
- 大内千年ほか 2006『潤井戸地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ-市原市中潤ヶ広遺跡(上層)-』(財)千葉県教育振興財団
- 小笠原永隆ほか 1998『千葉東南部ニュータウン19-有吉北貝塚-』(財)千葉県文化財センター
- 岡田光広ほか 1998『空港南部工業団地埋蔵文化財調査報告書1-山武郡芝山町古宿・上谷遺跡-』(財)千葉県文化財センター
- 加藤修司ほか 2002『千葉東南部ニュータウン25-千葉市有吉城跡1(縄文時代以降)-』(財)千葉県文化財センター
- 加納実 2020『山武郡芝山町古宿・上谷遺跡の再検討-小規模集落の分析にむけて-』『研究連絡誌』第82号(公財)千葉県教育振興財団
- 上守秀明ほか 1992『多田遺跡』『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』(財)千葉県文化財センター
- 川口正幸ほか 2006『忠生遺跡群 発掘調査概要報告書』忠生遺跡調査会
- 川口正幸ほか 2007『忠生遺跡A地区(Ⅰ)』忠生遺跡調査会
- 川口正幸 2011『東京都町田市忠生遺跡群B地区(Ⅱ)』忠生遺跡調査会
- 川根正教ほか 1997『中野久木谷頭遺跡C地点』流山市教育委員会
- 木島勉ほか 2007『日本の遺跡24 長者ヶ原遺跡』同成社
- 木島勉 2019『ヒスイ原産地での玉類製作』『身を飾る縄文人』栗島義明編 雄山閣
- 小林清隆 2008『千葉東南部・千原台ニュータウン内出土の縄

- 文時代石製玉類』『研究連絡誌』第69号(財)千葉県教育振興財団
- 小林清隆 2010『房総における大珠の在り方』『房総の考古学』六一書房
- 小林清隆 2012『千葉県出土の大珠について』『縄文時代のヒスイ大珠を巡る研究』栗島義明編
- 小林清隆 2016『房総における大珠の在り方(その2)』『玉文化研究』第2号 日本玉文化学会
- 小林清隆 2017『房総における縄文時代後晩期の石製玉類概観』『千葉縄文研究』7 千葉縄文研究会
- 小林清隆ほか 2017『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書32-東金市養安寺遺跡・大網白里市養安寺遺跡-』(公財)千葉県教育振興財団
- 小林清隆 2020『房総における大珠の在り方(その3)』『研究連絡誌』第82号(公財)千葉県教育振興財団
- 斎木勝ほか 1976『千葉市中野僧御堂遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 高田博ほか 1986『千原台ニュータウンⅢ(草刈遺跡B区)』(財)千葉県文化財センター
- 高橋保雄ほか 2018『一般国道8号 糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書Ⅺ 六反田南遺跡Ⅵ』(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 千種重樹ほか 1999『常陸大宮坪井上遺跡』大宮町教育委員会
- 土山明編 2019『日本の国石「ひすい」-バラエティーに富んだ鉱物の国-』株式会社成山堂
- 土肥孝 1997『日本の美術 No.369 縄文時代の装身具』至文堂
- 西野元ほか 1971『高根木戸』船橋市教育委員会
- 西川博孝ほか 2015『酒々井町飯積原山遺跡4-酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書-』(公財)千葉県教育振興財団
- 西川博孝ほか 2019『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書15-柏市小山台遺跡B区-縄文時代以降編』(公財)千葉県教育振興財団
- 堀越正行 2019『翡翠製大珠の真相とその社会背景』『東京考古』37 東京考古談話会
- 三浦和信ほか 1993『千葉東南部ニュータウン18 鎌取遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 村串まどか 2020『坪井上遺跡・ヒスイ製大珠の蛍光X線分析』『筑波大学 先史学・考古学研究』第31号 筑波大学人文社会科学部研究科 歴史・人類学専攻
- 柳澤亮ほか 2005『担い手育成基盤整備事業芹沢地区 国道299号線バイパス建設事業 埋蔵文化財発掘調査報告書-聖石遺跡 長峯遺跡 別田沢遺跡-』(財)長野県文化振興財団
- 山本直人 2020『縄文時代の装身具』『ピースでたどるホモ・サピエンス史 美の起源に迫る』池谷和信編 昭和堂
- 横山仁ほか 2005『東関東自動車道水戸線酒々井PA埋蔵文化財調査報告書2-酒々井町墨古沢南Ⅰ遺跡-縄文時代編』(財)千葉県文化財センター
- 吉野健一 2006『東関東自動車道(木更津・富津線)埋蔵文化財調査報告書7-君津市三直貝塚-』(財)千葉県教育振興財団